

「生涯活躍のまちアドバイザー」養成 のための研修テキスト見直し等に 関する調査業務

2019年10月8日（火）

「生涯活躍のまち」担当者会議向け資料



一般社団法人 あなたのまちのお困りごとは何ですか？

生涯活躍のまち推進協議会

2019年2月26日（火）～27日（水）に開催された 「地域アドバイザー・プレ研修」より

雄谷良成

山崎亮さん



**雄谷良成（佛子園理事長、
JOCA会長、生涯活躍のまち推
進協議会会長）**

定年のないエイジフリーの時代。いままでは障害者を社会で誰かが面倒をみるという考えが一般的だったが、私たちのところに「児童養護施設で子どもの話し相手になりたい」という発達障害の青年がいるように、社会保

障の対象とされていた人がそれとは反対側の立場になる。まだまだ人材はいる。地域の拠点ができても、仕事がないと戻ってこられない。生涯活躍のまちのネクストステージでは事業承継を柱に。

山崎亮（studio-L代表）

どんな事業も市民参加で進める方が、主体的になり、学び、行動を起こしてくれる。地域のコアメンバー100人が10のチームに分かれ、①日々、練習ができているか、②練習試合をしているか、③年間2回くらい全国大会に出ているか（たとえばグッドデザイン賞に応募するなど）、④メンバーの役割（キャプテンや会計など）を自分たちで決めているか、⑤新人の勧誘をしているか（新入生が入らないと同じメンバーで高齢化）、⑥卒業の仕組みをつくっているか、⑦部費を自分たちで捻出できているか、をクリアすれば、ぼくらは地域を離れる。

第1回「生涯活躍のまち」推進アドバイザー人材養成モデル研修

2019年9月10日（火）～12日（木） 於：東京・パズル浅草橋

「生涯活躍のまち」を推進していく専門人材を養成するための研修カリキュラムの開発にフィードバックするため、試行的に行うモデル研修。

初日
基調説明「生涯活躍のまちについて」
中野 孝浩（内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局参事官）
講演「生涯活躍のまち・つる」
山口 哲央（山梨県都留市役所総務部企画課長）
講演「地域主導のまちづくり」
西上 ありさ（studio-L）
鼎談（上記3人による）
「推進アドバイザーに求められる姿勢とは」



2日目
講義「政策課題の整理と理解」
テーマ「活力ある超高齢社会を作るには」「Society5.0 地方都市における次世代産業育成」
講師 後藤 純（東京大学高齢社会総合研究機構特任講師）
講義・事例紹介「地域運営組織を活用した取組を紹介」
講師 荻野 亮吾（東京大学高齢社会総合研究機構特任助教）
講義・ワーク① ディスカッションテーマ「わが町を生涯活躍・人生100年時代の観点から点検する」
ファシリテーター 後藤 純（東京大学高齢社会総合研究機構特任教授）

3日目
講義・事例紹介「「住まい」「ケア」「活躍」「移住」「コミュニティ形成」の事例の紹介」
講師 堀田 直揮（青年海外協力協会事務局長）
講義・ワーク② ディスカッションテーマ「生涯活躍のまちに取り組む最初の一步を考える」
ファシリテーター 後藤 純（東京大学高齢社会総合研究機構特任教授）
グループ発表・振り返り

基調説明「生涯活躍のまちについて」

中野 孝浩（内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局参事官）



1 「生涯活躍のまち」について

健康でアクティブな生活の実現、希望に応じた住み替え支援、地域の多世代の住民との協働、地域包括ケアシステムとの連携、継続的なケアの確保といったテーマごとに説明。

2 移住する人 「高齢者」「若年層」「壮年層」

戦後の人口動向を示しつつ、高齢者の体力が1998年以降、若返っているデータも紹介しながら、セカンドキャリアを地方で始めることを提言。

3 地域づくり

まちの魅力は、ハードだけでなく、エリア全体の多様性＝誰にも居場所と役割があるコミュニティの事例。

4 生涯活躍のまちの「アドバイザー」について

まち・ひと・しごと創生総合戦略（2018改訂版）のポイントとしての「生涯活躍のまち」推進アドバイザー。

5 「アドバイザー」に求められる支援とは

アドバイザー＝市町村のニーズを踏まえつつ、官民連携の具体案についてアドバイスする。

講演「生涯活躍のまち・つる」 山口 哲央（山梨県都留市役所総務部企画課長）



都留市は平成25年度にうたったシルバー産業の構築・推進がその後の日本版CCRCに合致。**生涯活躍のまちは住民の幸せを実現する手段**と位置づける。

同市には都留文科大学、県立産業技術短期大学校、健康科学大学看護学部があり、大学連携を進めるために「大学コンソーシアムつる」を立ち上げた。**ヒトづくり（都留文科大学）、モノづくり（県立産業技術短期大学校）、健康づくり（健康科学大学看護学部）が3本柱。**

具体的に進行しているプロジェクトとして、単独型居住プロジェクト（下谷地区。既存団地のストック活用によるゆいま～る都留。9月末開設）、複合型居住プロジェクト（田原地区。都留文科大学近隣の市有地への企業誘致による事業地開発、各種住宅5棟程度〔50～140戸程度〕を想定）について説明。

生涯活躍のまちは医療、教育、世代間交流、生涯学習、産業など**全庁横断的な取り組みが必須**。県との連携があるかないとでは大きな違い。

事業者からは事業者目線での提案をいただきたい。

講演「地域主導のまちづくり」 西上 ありさ (studio-L)



コミュニティデザイナーにとってとくに大切なことは「捨てる」（自分のやり方や固定概念を捨てる）、「よくきく」（アドバイスを素直に聞く、受け止める）、「実践する」（考え込まずにやってみる）。地域のニーズに応じた策には、「活性化策」（ブランドづくり、観光など）、「維持策」（生きがいになるものづくりなど）、「縮小策」（終の棲家づくり、聞き書きなど）があり、対象の地域で取り組むべきはどれかを把握しなければならない。

住民が参加（聞く・知る、考える、要求する）から参画（加わる、支える、仕切る）していくためには、**積極的に発言し、行動するトップの人をより引き上げる**必要がある。

厚生労働省の介護のイメージ刷新事業では「これからの介護・福祉の仕事を考えるデザイン・スクール」を全国各地に開講。様々な業種の生徒）が、「**バックキャスト**」（目標となるような状態を想定し、そこを起点に現在を振り返って、いま何をすべきかを考える）と「**デザイン思考**」（デザインに必要な思考方法と手法を利用して、ビジネス上の問題を解決する）で進め、施設介護、訪問介護の現場に行き、言葉だけではなく、見て感じたことを絵や図化してもらい、これまでの介護のネガティブなイメージを払しょくした。

鼎談 「推進アドバイザーに求められる姿勢とは」 中野孝浩・山口哲央・西上ありさ



「住民に危機感がない。また、首都圏から高齢者を移住させてどうするんだ、という声も多い。それに対してどう答えるべきか」

「サ高住を運営する生涯活躍のまち事業形成主体として悩みは多い。とくに行政との関係はどうあるべきか」

「市町村の方で取り組みが進まない。どういうアプローチが可能か」

「C C R Cに取り組む市町村がだんだんフェードアウトしつつある。国が計画を見直すなか、これまでの『絵に描いた餅』的なところを改善してもらい、われわれも市町村に伝えるような魅力がほしい」

講義 政策課題の整理と理解

「活力ある超高齢社会を作るには」 「Society 5.0 地方都市における次世代産業作成」

後藤純・東京大学高齢社会総合研究機構特任講師

本研修を予行練習とし、これを現地で実践すれば、アドバイザリー・ボードを立ち上げられる。そのような仕組みを入れた。詳細なマニュアル付き。

【新しい社会保障】 救貧・防貧からライフスタイルに伴走していく
【在宅医療を含む地域包括ケアシステムについて】

【在宅医療介護連携推進事業】
【自立支援とリハビリテーション】
【人生100年時代のビジョンとフレイル予防】
【地域マネジメントとコミュニティ活動の育成支援】 ボランティアからスポンテニアスへ
【新しいコミュニティ】
【生きがい就業】
【次世代ヘルスケアビジネスの創造】
【コンパクトシティ+ネットワーク】
集約か分散か



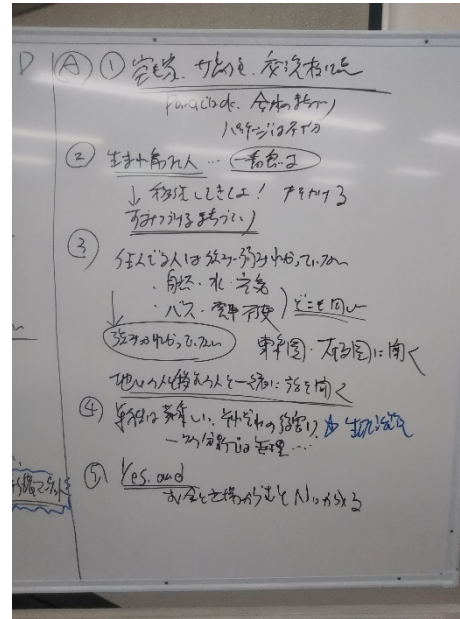
講義 事例紹介

「小さな拠点・地域運営組織と教育/生涯学習分野の事例紹介」

荻野亮吾 東京大学高齢社会総合研究機構特任助教

公民館は地域の課題解決の場。狭い意味での教育施設に限定せず、全国に約1万6,000ある公民館をまちの活性化のために使っていく。

成功事例：株式会社いろどり（徳島県上勝町）、やねだん（鹿児島県柳谷集落）など、行政、補助金に頼らないまちづくりの事例を参考に、「小さな拠点」の形成と地域運営組織の持続的な活動のため、農協や商工会等、地域内外の多様な組織と連携することの重要性を強調。



ワーク① ディスカッションテーマ
「わが町を生涯活躍・人生100年時代の観点から点検する」
ファシリテーター 後藤 純（東京大学高齢社会総合研究機構特任教授）



○地元の施設の機能がニーズに合っているのかどうかを把握できていない。生涯活躍のまちには地域包括ケアの構築が重要。市町村は「こんな人に来てほしい」という発信も積極的に行うべき。

○地域資源を生かし、どうやって人を引っ張ってこられるのか。そのための雇用をつくれるか。地域の人も旅行者も自分たちの地域のすばらしさや充実した介護施設のよさをわかっていない。成功事例をもっと学びたいし、情報提供の支援をいただければ助かる。

○空き家や交流拠点の取り組みの成果は上がっているが、まちづくりまでのレベルではない。生涯活躍のまちとは、そこで生まれ育った方がこれからも住み続けたいと思わせるところ。自分たちの強みや弱さは地元の人にはわからない。それらがわかるのは移住者。市町村、住民、事業者の連携は大切だが、そこには「Yes and」式の議論は不可欠。そうすることで何をやるべきかが明確になる。

○そこに住む人々のコミュニケーションが活発に行われているところが人を引き付ける。「つくりおき食堂」というアイデアが出た。食事をつくるだけ、販売だけ、というように個々の都合に合わせた時間帯を利用することで、多くの人がかかわれる仕組みをつくる。事業を立ち上げるための資金的な補助がほしい。



講義・事例紹介

「住まい」「ケア」「活躍」「移住」「コミュニティ形成」の事例紹介 堀田 直揮（青年海外協力協会事務局長）

生涯活躍のまちを推進するために縦割りを越える。経済が成長するにつれ、高齢者、子ども、勤労者などの場が高度専門化されていった。いまはその逆。地域に返す。そして戻してもらおう受け皿が「ごちゃまぜ」。その事例として佛子園がどういう事業を展開しているのかを説明。

- ・ 二草三木西圓寺（障害者や認知症の高齢者が漬物づくり）、Share金沢（西圓寺をモデルに、さらに学生やテナントを入れた）、輪島KABULET（分散した空き家利活用）
- ・ 人生100年時代戦略（3ステージからマルチステージへ）
- ・ 事業化のためのプロジェクトエリアの設定、福祉収入と事業収入のバランス



講義・ワーク② ディスカッションテーマ 「生涯活躍のまちに取り組む最初の一歩を考える」 ファシリテーター 後藤 純（東京大学高齢社会総合研究機構特任教授）



○南伊豆町 杉並区との連携による特別養護老人ホームの整備事業が再スタート。特養や子育て事業者向けのアドバイザーがほしい。一自治体だけでなく、広域での自治体同士の連携も必要。研修は1回目：CCRCの理解、2回目：住民へのヒアリング、グループワーク、3回目：事業を企画、を想定。

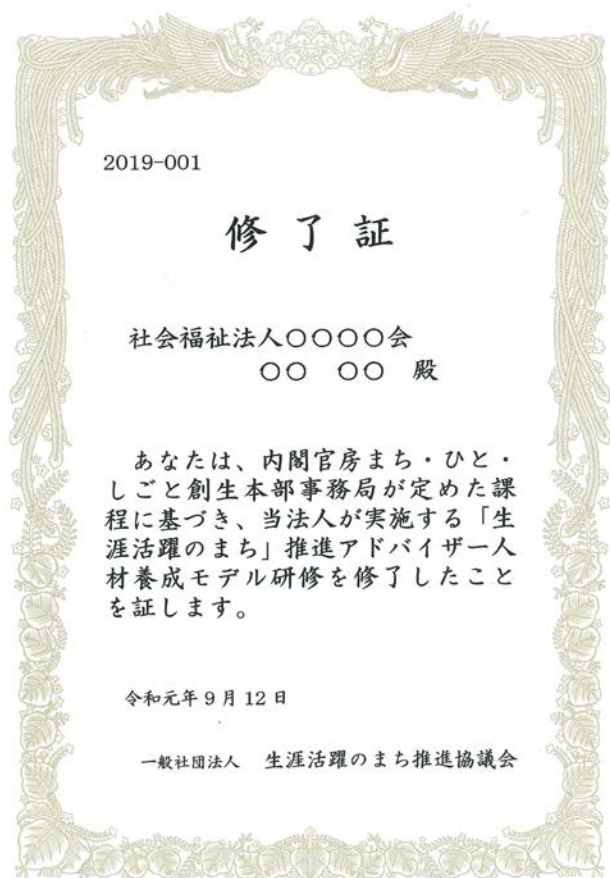
○旭市 首都圏に近い中途半端な位置。その利点や魅力が伝えられていない。サ高住、子育て、デイサービスなどを一カ所で「ごちゃまぜ」で行う。生涯活躍のまちへの理解（住民、事業者）を深める

必要がある。

○関係部署の若手を組み合わせる。一部署に責任をとらせない。アドバイザー候補には幅広く呼び掛ける。

○県が市町村に対して生涯活躍のまちのイメージをどう伝えるかが課題。困っていない（と思っている）市町村を説得するためには、総合的なビジョンを提示する必要。

「生涯活躍のまち」推進アドバイザー人材養成モデル研修修了証



3日間、参加した方に授与。
第1回は13名の方が修了された。
(うち;自治体6名、事業者7名)

参加者数:

初日 48名 (うち;自治体32名、事業者16名)
2日目 31名 (うち;自治体24名、事業者7名)
3日目 21名 (うち;自治体18名、事業者6名)

参加自治体(都道府県): 茨城県、栃木県、群馬県、千葉県、新潟県、静岡県、愛知県、三重県、京都府、和歌山県、奈良県、岡山県、広島県、山口県、愛媛県、高知県、大分県、長崎県、佐賀県、沖縄県

(基礎自治体): 東大和市(東京都)、川崎市、鎌倉市(神奈川県)、旭市、多古町(千葉県)、富士見市、春日部市(埼玉県)、前橋市、玉村町(群馬県)、佐久市(長野県)、都留市(山梨県)、南伊豆町(静岡県)、

東大阪市(大阪府)、呉市、安芸太田町(広島県)、南部町(鳥取県)

事業者: 社会福祉法人、まちづくり会社、流通、保険、地銀シンクタンク、不動産、高齢者向け住宅運営、都市計画・開発、農業生産法人、独立行政法人等

次回の「生涯活躍のまち」推進アドバイザー人材養成モデル研修

目的

本研修は現在の地方創生をめぐる状況や「生涯活躍のまち」の理念・基本コンセプトの方向性、アドバイザーとして求められる役割等について理解するとともに、実際に「生涯活躍のまち」に取り組んでいる事例等を参考に、グループワークを通して、ファシリテーション能力や課題解決能力を向上させることを目的とします。

全体の流れ

1日目	概要等
生涯活躍のまち（日本版CCRC）	現在の地方創生に向けた取組状況や生涯活躍のまち構想の基本コンセプト、目的やねらいなどについて理解し、アドバイザー人材に求められる基礎知識を習得し、構想づくりから実行計画にいたるプロセスについて学ぶ。
生涯活躍のまちのつくり方（仮）	生涯活躍のまち先進自治体の首長より、地方経済の活性化、移住の流れ、関係人口・交流人口の拡大などの取り組みを通して、事業実現に向けての課題や目指している方向性を学ぶ。
地域主導でつくりあげる生涯活躍のまち（仮）	事例をもとに、地域住民を巻き込んでいくプロセスから、アドバイザーとしての役割やファシリテーション手法を学ぶ。
事例で読み解く生涯活躍のまち	生涯活躍のまちのモデルを紹介し、様々な立場の登壇者の観点から生涯活躍のまちづくりのプロセスを検証する。

2日目	概要等
生涯活躍のまちで統合する政策課題とその対応	高齢者の活躍が期待される領域として医療・職業・住環境（い・しょく・じゅう）をテーマに政策の方向性等や事例を紹介する。
生涯活躍のまちの事例紹介	「住まい」「ケア」「活躍」「移住」「コミュニティ形成」の事例紹介、構想を推進していくための体制づくり、ビジネスモデルの事例等を学ぶ。
グループワーク①	各自治体・各人のこれまでのまちづくりを振り返りながら、課題についてさらに深掘りを行い、今までの取組事例等を参考に課題解決のための方策を考える。

3日目	概要等
グループワーク②	生涯活躍に向けてどのような取り組みが必要になるのかをグループワークを通じ、生涯活躍のまち構想の骨子を検討する。
グループワーク③	参加者は県職員や市町村職員、地域住民、事業者などの役割を想定しながら、骨子を作成する。
発表	構想の骨子を発表。それをいかに地域へ広げていくかの議論を行う。

研修の狙い

地方創生の現状や生涯活躍のまち構想の基本コンセプトの方向性及び具体的な取組事例等の基礎知識を習得することにより、アドバイザーに求められる人材像を理解する。

政策の方向性や取組事例等を参考に生涯活躍のまち構想の基本コンセプト、テーマに沿って、まちの課題を抽出。グループワークを行うことで、ファシリテーション能力を向上させる。

3日間で学んだ政策の方向性やビジネスモデルの事例等を知識として習得し、「生涯活躍のまち」の構想の骨子を作成することで、生涯活躍のまちづくりの実践のための課題解決能力を向上させる。